

「中吊りギャラリー」は、株式会社電通ワンダーマンとの共同研究の一環として実施しました。加藤文俊研究室では、「モバイルリサーチ」をテーマに、ケータイと紙媒体との連携や人ひとの回遊行動の理解など、あたらしい調査方法の開発、地域メディアの可能性について調査・研究をすすめています。



4 フィールドワークの経験をまちに還す

まず、だれの「作品」が掛かっているか、事前にわからないので、乗って、探すだけで、予想以上にドキドキしました。できるだけ多くの「作品」を見るためには、途中で降りて次の電車を待ったり、すれ違う車両を眺めたり、ちょっとした工夫が必要ですが、しぶんたちのつくった中吊りが人目に触れている現場を、じかに見ることが出来ます。江ノ電は、ほくたち身の丈に合った、ちょうどいいスケールの「移動ギャラリー」だったのかもしれない。中吊り広告の姿をした調査報告書は、ごく自然に電車という空間にとけ込んでいました。「何の広告だろう?」と思う人はいても、こうしてフィールド調査の成果が、「中吊りギャラリー」に展示されていることには、気づかなかつたはず。通勤帰りの「お父さん」が、(知ってか知らずか)中吊りを見上げている姿を見ると、ちょっと愉快な気分になりました。フィールドワークの経験は、ほくたちの手許だけで活用するのではなく、現場に「還る」必要があるのです。

・中吊りギャラリー http://vanotica.net/enoden_gallery/

2007年9月1日発行

慶應義塾大学 環境情報学部 加藤文俊研究室
〒252-9520 神奈川県藤沢市遠藤5322
Phone: 0466-49-3619
URL: <http://fklab.net/>

場の手カラプロジェクト
vanotica

「中吊りギャラリー」は、株式会社電通ワンダーマンとの共同研究の一環として実施しました。加藤文俊研究室では、「モバイルリサーチ」をテーマに、ケータイと紙媒体との連携や人ひとの回遊行動の理解など、あたらしい調査方法の開発、地域メディアの可能性について調査・研究をすすめています。

「中吊りギャラリー」は、株式会社電通ワンダーマンとの共同研究の一環として実施しました。加藤文俊研究室では、「モバイルリサーチ」をテーマに、ケータイと紙媒体との連携や人ひとの回遊行動の理解など、あたらしい調査方法の開発、地域メディアの可能性について調査・研究をすすめています。



電車にゆられて、まちを想う。
中吊りギャラリー 2007年7月9日(月)～20日(金)

●中吊りギャラリー
2007年7月9日(月)～20日(金)

秋元 多恵子
天野 将仁
飯島 由希子
市川 友美
伊藤 翔
海野 紗瑠
生出 淑子
加藤 文俊
川島 史
斎藤 卓也
嶋田 彩未
杉浦 碧
出縄 恵
野辺 さやか
長谷川 裕子*
濱野 麻里
原田 佳南子
藤井 瑠
松浦 巧枝*
美馬 弘宣
持木 俊介
山中 良太

* 湘南Clip



3 電車をギャラリーにする

研究室のメンバーは、定期的に現場を訪れながら、3か月ほどフィールドワークを続けました。逐次、ポータルサイトに蓄積されていったデータをもとに、フィールドワークの成果を電車の中吊り広告のフォーマットでまとめることにしました。これは、何かの商品やサービスを「売る」ための広告ではありません。創造性にあふれ、人ひとを惹きつける場所の魅力(=場のチカラ)とは何か…。それぞれが、電車に沿ってつくられるまちのイメージを表現するのです。制作の途中で、プロの意見やアドバイスを聞き、中吊り広告を仕上げました。通常、フィールド調査の成果は、報告書やプレゼンテーションという形で公開されることが多いのですが、今回は、地域の人ひとにより近いかたちで公開するために、電車を「移動ギャラリー」に見立てました。いつもの電車にゆられながら、ふとしぶんの暮らしているまちを想う。そのきっかけづくりになることを期待しています。